

里刀自小論

——いわき市荒田目条里遺跡第二号木簡から——

平川 南

はじめに

- 一 荒田目条里遺跡概要
- 二 第二号木簡概要

- 三 里刀自の用法
- 四 里刀自の意義

論文要旨

近年、古代史研究の大きな課題の一つは、各地における地方豪族と農民との間の支配関係の実態を明らかにすることである。その末端行政をものがたる史料として、最近注目を集めているのが、郡符木簡である。郡司からその支配下の責任者に宛てて出された命令書である。この郡符木簡はあくまでも律令制下の公式令符式という書式にもとづいているのである。したがって、差出と宛所を明記し、原則として律令地方行政組織（郡―里（郷）など）を通じて、人の召喚を内容とする命令伝達が行われるのであろう。これまでに出土した一〇点ほどの郡符木簡はいずれも里（郷）長に宛てたもので、例外的津長（港の管理責任者）の場合は個人名を加えている。このような情況下で新たに発見された荒田目条里遺跡の郡符木簡（第二号木簡）は、宛所が「里刀自」とあり、三六名の農民を郡司の職田の田植のために徴発する

という内容のものである。まず第一に、刀自は、家をおさめる主人を家長、主婦を家刀自とするように、集団を支配する女性をよぶのに用いている。宛所の里刀自は、上記の例よりしても、本来の郡―里のルート上で理解するならば、里を支配する里長の妻の意とみなしてよい。

第二には、行政末端機構につらなり、戸籍・計帳作成や課役徴発を推進する里長と、在地において農業経営に力を発揮する里長の妻―里刀自の存在がにわかにクロ―ズアップされてきたと理解できるであろう。

これまで里刀自に関する具体的活動の姿は皆無であっただけに、今後、女性と農業経営の問題を考察する格好の素材となると考えられる。

はじめに

近年、古代の地方社会を解明する大きな手がかりを与えてくれる資料として、郡符木簡が注目されている。この木簡は郡から里などの下部機構の責任者あてに下達されたものである。このような重要な意義を有する郡符木簡について、筆者はすでに「郡符木簡―古代地方行政論に向けて―」（虎尾俊哉編『律令国家の地方支配』一九九五年）を発表している。その小稿では、郡符について、次のようにその性格と意義を整理した。

表1 郡符木簡一覧表

遺跡名	点数	法量	差出	宛所	召喚人・物	召喚先	年代
新潟県三島郡和島村八幡林遺跡	1	585 × 34 × 5	郡司符	青海郷（長）	虫丁高志君大	郡司	8C前半
兵庫県水上郡春日町山垣遺跡	1	(361) × 49 × 6	符	春日里長等	春日君廣橋他三人		8C前半
滋賀県野洲郡中主町西河原遺跡	1	(145) × 34 × 5	郡司符	馬道里長	他女丁久米口女		8C前半
京都府向日市長岡京跡	1	(99) × (30) × 5	郡符	采女郷文部家	（習書木簡）		8C後半
岐阜県古城郡古川町杉崎廃寺	1	(80) × 29 × 7	符	飽見×			9C初頭
長野県更埴市屋代遺跡群	2	(392) × 55 × 3.5	符	屋代郷長里正等	敷席郷匠丁娘他造宮人夫十人		8C前半
静岡県浜松市伊場遺跡	1	(99) × 35 × 3	符	余戸里長			8C前半
福島県いわき市荒田目条里遺跡	2	(282) × 49 × 10	符	竹田郷長里正等			8C前半
		(230) × 42 × 3	郡符	立屋津長伴マ福		為客料充遣	9C半ば
		594 × 45 × 6	郡符	里刀自	（挾抄水手カ）	郡司職田	〃

郡符木簡は、地方行政機構内における郡司からの下達文書であり、木簡とはいえ、公式令に定められた本来の符式文書の書式を基本的にふまえているものである。そのうえ、木簡の特性が十分に発揮され、機能していると思定できる。郡から下部の各機構の責任者である宛所に発せられ、命令を受けた責任者は、その木簡に明記されている召喚人等を伴い、召喚先に赴き、郡司等の確認を経たのちに木簡は廃棄されたと考えられる。そこで、郡符木簡が出土している各遺跡を検討した結果、いずれの遺跡も郡家の中心施設がその附近に存在または想定される郡家関連施設または、郡家別院である点で共通している。そして、郡符木簡の検討を通じてはからずも、郡家が在地における多様な機能を集約させた一大拠点として存在したことを新たに認識することができたと思われる。

本稿でとり扱う荒田目条里遺跡出土の第二号木簡は、まぎれもなく、郡符木簡であり、「里刀自」の解釈についても、何より重要なことは郡符木簡という資料の属性を十分に考慮しなければならない。本木簡は、二つに切断され、廃棄されたが、接合することにより原状の完型木簡として復原することができる。長さ約六〇センチ、幅四・五センチのなかに記載された文字は、古代の地方官衙遺跡出土木簡として比類のない豊かな情報を我々に与えてくれる。

いわき市教育委員会・いわき市教育文化事業団から調査報告書が近く刊行される予定であるが、その報告書は、当然遺跡・遺物全体を取り扱うものである。そこで、いわき市教育委員会、いわき市教育文化事業団の許可をいただき、ここに第二号木簡のみに限って、その内容と意義な

どに関して詳細に考察を加えることとする。

一、荒田目条里遺跡概要（遺跡等の位置は論文末参照）

遺跡は福島県いわき市平菅波地内^①に所在する。夏井川下流の右岸に位置し、太平洋の海岸より西へ約二・五キロメートルの所にある。

夏井川下流域の海岸平野には、現海岸線を除いて、四列の浜堤列が認められる。最終氷期が終わり、海進に転じ、五〇〇〇年BP頃から海進がすすむ中で第一〜第四浜堤が形成された。第一浜堤は四五〇〇年前に、第二浜堤は三九〇〇年以前に、現海岸線は一八〇〇年までに形成された。遺跡の西方約一五〇メートルに延喜式内社の大國魂神社がある。

大國魂神社の立地する丘陵の東斜面は孤状をなし、急斜面で海蝕崖である。同神社の南に位置する字砂畑・新屋敷の集落の位置する微高地は浜堤で海岸線に並行に走る低い砂丘である。これが第一浜堤であって縄文海進期の海岸線を示している。第二列の浜堤はやや複雑な形をしているが、上大越の石崎附近と思われる。荒田目の北部にある田中内北、鼠内は夏井川の自然堤防である。これら第一浜堤、第二浜堤、自然堤防に囲まれた後背低湿地が条里制地割の水田である。

現在の土地割と地籍図による復原図を比較すると、明治三〇年代の耕地整理は大規模な改変ではなく、基本的には条里制地割を踏襲している。すなわち、東西方向の道路や水路が一〇九メートル間隔に平行に走り、南北方向も一部を除き、条里の線を引き継いでいる。これらの水田の灌漑は、少し離れた谷頭部にある太郎作入溜池、南作上池、菅波入溜池などに溜池を作り、灌漑水路を通じて、灌漑範囲を水田化した^②。

ところで、本遺跡の南東方向へ約一・五キロメートルの所に磐城郡家の中心施設に比定される根岸遺跡がある。根岸遺跡は太平洋の現海岸線から西へ約一・四キロメートルの台地上にある。一九九〇年度からの範囲確認調査において、遺跡のA地点西側一帯からは礎石建物跡七棟（全面掘込地業六棟、坪地業一棟）、掘立柱建物跡二棟以上の建物群（倉庫跡）が数時期にわたって検出され、正倉院であることが判明している。

さらに一九九四年度のA地区の東側（A地区最東端の台地上とその裾部）の調査において、桁行七間梁行四間の四面廂付建物跡、桁行七間梁行二間の細長い掘立柱建物跡が多いこと、一箇所で大形の建物跡が六期の重複をみるなど、多くの成果を得ている。このことから、この調査区域は正倉院の東側に位置する郡庁院の中枢地区と想定された。

荒田目条里遺跡は、約二〇、〇〇〇平方メートルにわたる面積を有し、一九八九年から続いている常磐バイパス改築工事に伴う発掘調査により、古代の水田跡を含む集落跡や古墳跡など、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。

一九九三年に調査された荒田目条里遺跡は、荒田目条里制遺構のほぼ中央部の礼堂地区に位置している。浜堤の東側裾部で低湿地との境目にあたる。調査の範囲は、一八〇〇平方メートルとわずかながら、確認された古代の幅一六メートル以上にわたる河川跡の中から祭祀遺物を中心に多数の遺物が出土した。

発見された遺物は、その大半が古墳時代から平安時代にかけての約一〇万点におよぶ土器である。これらの土器のなかに、人面墨書土器と、

「子」「好」「田」「赤井」「田島」「東」「倉」「山寺」「柏井」などの一八〇点の墨書土器が含まれている。石器・石製品は、剣形・鏡形の滑石製模造品などが七七点、土製品では、手握土器・土玉・土錘・土馬・舟形土製品など六四点、金属製品では紡錘車・手斧・馬具・刀子など二五点、また、木製品では、木簡三八点、絵馬三点、人・馬・弓・矢などを模したものや、椀・皿・蓋・定規・下駄・刀子柄・杵・曲物・櫛・鉾・箆などあわせて四〇〇点出土している。なお、低湿地のため胡桃・桃・梅・しうびなどの種や馬骨などが数多く出土している。

二、第二号木簡概要(図1—論文末参照)

1、釈文

・「郡符、里刀自、手古丸、黒成、宮澤、安継家、貞馬、天地、子福積、奥成得、内宮、公吉、惟勝、法圓、隠、百濟部於用丸、真人丸、奥丸、福丸、藤日丸、勝野、勝宗、貞継、浄人部於日丸、浄野、舎人丸、佐里丸、浄継、子浄継、丸、子部福継、_不足小家、壬部福成女、於保五百継、子槐本家、太青女、真名足、_不子於足、_不合卅四人」

右田人為以今月三日上面職田令殖可□發如件

・「大領於保臣 奉宣別為如任件□_(宣カ) 以五月一日

2、形状

短冊型の完形木簡である。現状では二片に分れているが、これは本木

五九二×四五×六

簡の廃棄の際に、刃物で両面から若干切り込みを入れ、折られて投棄されたものと判断できる。

墨痕はオモテに比べて、ウラの遺存状況が悪いが、ほぼ判読可能である。冒頭の「郡符」の部分は、墨痕の重なりがあり、その部分にかなり深い削り取り痕が存する。

2、記載内容

記載様式は次のとおりである。

(表) 差出+宛所+歴名

下達内容(右……如件)

(裏) 施行文言

位置

月日

記載内容は、冒頭の「郡符」から明らかなように、近年、各地で出土しているいわゆる郡符木簡と考えられる。荒田目条里遺跡では、第一号木簡に続いて二例目である。

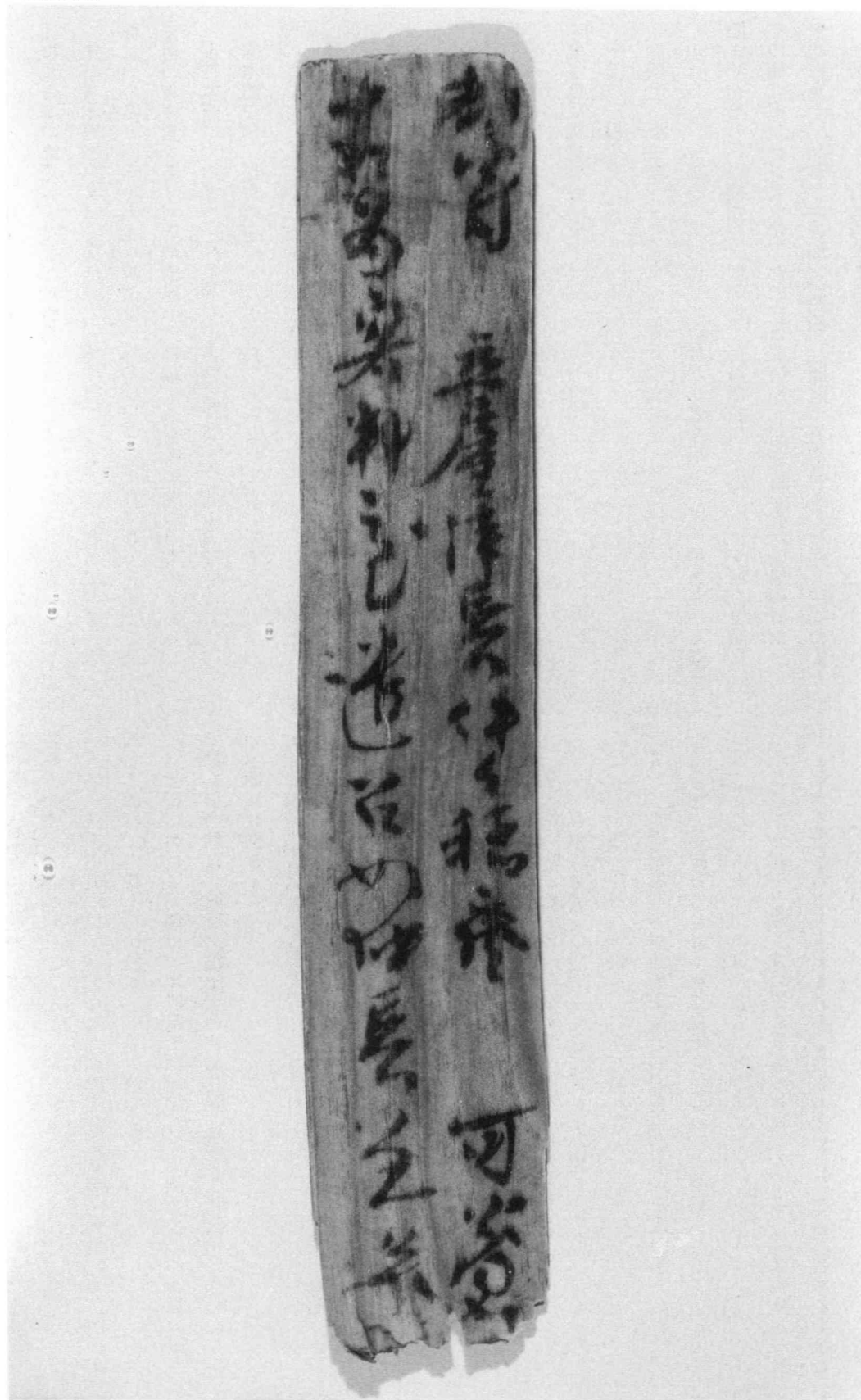
第一号木簡

・「郡符 立屋津長伴マ福磨 可□召× 右為客料充遣召如件長宣承×



(二三〇)×四二×三

郡司から立屋津長伴マ福磨に人の召喚を下達した文書である。下端欠損のために詳細は不明であるが、郡司から津長に符が下され、津の来客



9 荒田目条里遺跡第1号木簡〔勝田 徹氏撮影、いわき市教育文化事業団写真提供〕

のために、津長の管理下の船をあやつるかじとりや水手、または雑役に従事する津の周辺の人々などが徴発されたと考えられる。

第一号木簡でいえば、宛所は「立屋津長伴マ福鷹」、これまでの郡符木簡においても、その大きな特徴は、郡符は宛所がそれぞれの官司または官司の責任者であり、その下達の内容は人の召喚に関わるものである。

郡符木簡について、これまでの出土例を整理すると、次のようになる。本木簡では、郡符の宛所は「里刀自」とみなしてよいであろう。里刀自に続いて、人名が三十六人列記されている。

歴名の中に、ウジ名を有するものとなないものとが記されているが、この点は次のように理解しておきたい。

里刀自¹ 手古丸² 黒成³ 宮澤⁴ 安継家⁵ 貞継⁶ 天地⁷ 子福積⁸ 奥成⁹
 得内¹¹ 宮内¹² 吉惟¹³ 勝法¹⁴ 圓隠¹⁵
 百済部¹ 於用丸² 真人丸³ 奥丸⁴ 勝丸⁵ 菰目丸⁶ 勝野⁷ 勝宗⁸ 貞継⁹
 浄人部¹ 於日丸² 浄野³ 舍人丸⁴ 佐里丸⁵ 浄継⁶ 子浄継⁷
 丸子部¹ 福継² 足小家³
 壬部¹ 福成女²
 於保¹ 五百継² 子槐本家³ 太青女⁴ 真名足⁵ 子於足⁶

すなわち、冒頭の「里刀自」の戸はウジ名を略し、以下手古丸から圓隠までをその戸の構成員と理解し、百済部於用丸以下もウジ名を筆頭にその構成員のウジ名を略したのではないか。「里刀自」の戸の構成員が圧倒的に多く、しかも「吉惟」「勝法」「圓隠」を僧名とすれば、沙弥のような僧をも抱えた有勢の家と推測される。「浄人部於日丸」の戸において、

「浄野」「浄継」「子浄継」を含んでいる点も、この区分の妥当性を示しているのではないか。

人名に「手古丸」以下「○○丸」が九名みえるが、九世紀半ば頃の用例とすれば、史料上、比較的早い使用例であろう。

八世紀における用例は、現段階では木簡等の実例はない。管見の限りでも最も早い例は、藤原宮跡出土の初期荘園に関する弘仁元(八一〇)年の木簡に数例みえる。

・「弘仁元年十月廿日收納稲事

(玖束)

合壹千五百□□

山田女佃二町六段千二百卅三束 又有收納帳

(刻線)

凡海福万呂佃四段地子六段二百五十二束

收納帳

(刻線)

同日下廿束

使石川魚主

葛木寺進者

上三月丸弟□建丸

定残千四百八十玖束

浄丸福丸等

また、岩手県黒石寺薬師如来像の胎内墨書銘中「貞観四年(八六二)十二月」の年紀とともに「物部哀黒丸」という人名がみえる。

列記された人名は召喚される人々と考えてよいであろう。

里刀自を含む三十四人分のそれぞれの右肩にみえる「」は名簿と人物との照合を示す合点と考えられる。合点の認められない二名「足小家」と「子於足」については、左肩に「不」と記されており、これは「不参」

身決レ勝。居レ職以来。勤修ニ大橋廿四處。溝池堰廿六處。官舎正倉
一百九十字一。(略)並假ニ外從五位下一。

い『続日本後紀』承和十一年(八四四)正月辛卯条

陸奥国磐城郡大領外從五位下勲八等磐城臣雄公(下略)

磐城郡大領は「磐城臣」姓であるが、『続日本紀』神護景雲三年(七
六九)三月辛巳条に陸奥国大造道嶋宿祢嶋足の推挙のもとに、陸奥
国内全域の在地有力者の改賜姓が行われているなかに、「磐城郡人外正
六位上丈部山際」という人物が、「於磐城臣」と改姓されている。「於
磐城臣」は通常磐城郡内においては、磐城を略し「於保臣」と称し
たのであろう。

ところで、本木簡の年代が、のちに触れるように、同一遺構から共
伴している第三号木簡の年紀「仁壽三年」(八五三年)とほぼ同時期と
するならば、本木簡の位置部分「大領於保臣」は、『続日本後紀』承和
七年および同十一年条にみえる「磐城郡大領磐城臣雄公」と同一人物
の可能性が高いといえるであろう。

3、木簡の年代

古代の河川跡とされる第三号大溝跡の発掘区北西部の近接した地点
で、しかも同一層位から本木簡(第二号木簡)と第三号木簡が出土し
た。

第三号木簡

・「返抄検納公廩米陸升正科四升卅七石六斗(内カ)

右件米検納如件仍返抄

『□□□□□□』

仁壽三年十月□日米長□□□

(二七三)三五×一〇

公廩米の収納領収書、裏面にその年月日が記されており、「仁壽三年」
は西暦八五三年である。この第三号木簡の年紀から推して、第二号木
簡の年代は、ほぼ九世紀半ば頃と想定することが可能であろう。

三、里刀自の用法

本木簡は、郡符の宛所が「里刀自」となっている点がきわめて注目
される。

郡符木簡はこれまでの出土例によるかぎりには、主として人の召喚を
内容とし、宛所の責任者は召喚人とともに召喚先に赴き、郡符に記載
された人名と人物との照合を行なった後に、その地で廃棄されたと考
えられる。第一号木簡の宛所「立屋津長」、第二号木簡の宛所「里刀自」
が同一遺跡から出土している。このことは、郡符木簡は宛所―津長、
里刀自に下達されたのち、召喚人とともにおそらく磐城郡家の一面に
位置する荒田目条里遺跡の地に至り、勘検ののちに廃棄されたのであ
らう。

ところで、里刀自とは何を意味しているか、そのためにはまず刀自
の用法を明らかにしなければならない。刀自については、すでに義江
明子氏の詳細な考察が行われているが、義江氏が端的に結論した「ト
ジとは、(共同レベル・家レベルの両者を通じて)支配の契機の乏しい
統率者にとどまった女性の私的尊称であった」という指摘に対して、

若干異なる私見を以下述べてみたい。

『日本書紀』允恭天皇二年春二月条によれば、允恭天皇の皇后忍坂大中姫が母と家に在ったとき、鬪^つ雞^け国造が皇后に「戸母」と呼びかけているが、その訓注は「戸母、此をば觀^と自と云ふ」とする。『伊勢国風土記』逸文、度会郡条では、天日別命は、大国玉の神の女、彌豆佐々良姫命を「刀自」と呼んでいる。

刀自はトヌシ(戸主)の約といわれ、to(戸)+nō+usi(主)→tonusi→tonzi→to^ozi→toziとなる。戸口を守る者の意が原義とされている。

すなわち、一家の主婦権を持つ母の尊称として用いられている。

(1) 大刀自

『万葉集』巻第八 一四六五番の詞書

藤原夫人の歌一首 明日香浄御原宮に天の下知らしめしし天皇の夫人なり。字を大原大刀自といへり。即ち新田部皇子の母なり。

藤原夫人は鎌足の娘、五百重娘で新田部皇子の生母である。夫人は妃と嬪との間の地位、天皇に侍し仕える婦人をさし、夫人の国訓は「オホトジ」(大刀自)である。

(2) 家刀自・家室・家母

イ、『日本書紀』(抜粋)

○ 上巻—二 狐を妻として子を生ま令むる縁

昔欽明天皇の御世に三野の国大野の郡の人、(略)家室脅え惶りて家長に告げて言はく(略)二月三月の頃に設けし年米を舂く時、其の家室、稻舂女等に間食を充て将として碓屋に入る。

○ 上巻—十八 法花経を憶持し、現報を得て奇しき表を示す縁

昔大和の国葛木の上の郡に、一の持経の人有り。丹治比の氏なり。(略)家母に白して曰はく「門に客人在り、恰も死にし郎に似たり」(略)家長も見て亦怪しび問ひて、

○ 中巻—十六 布施せ不ると放生するとに依りて、現に善惡の報を得る縁

聖武天皇の御代に、讃岐の国香川の郡坂田の里に、一の富人有り。夫と妻同姓にして綾君なり。(略)家室・家長に告げて曰はく。

○ 中巻—三十三 女人、惡鬼に點レテ食噉はるる縁

聖武天皇のみ世、大和の国十市の郡菴知の村の東の方に、大きに富める家有り。(略)明日晩ク起き、家母戸を叩キテ

○ 中巻—三十四 孤の嬢女、觀音の銅像に憑り敬ひ、奇しき表を示して、現報を得る縁

諾楽の右京の殖槻寺の辺の里に一の孤の嬢^{みなじご}有り。(略)父母有りし時に、多く饒にして財に富み、数屋倉を作り(略)隣の大家、具に物を進り納る。(略)隣の家室曰はく。

(以上、岩波書店『日本古典文学大系、日本書紀』による)

以上の例でも明らかのように、上巻—二 舂米作業に際して稻舂女等の労働力を抱える有力な家、中巻—十六 富人、中巻—三十三 大きに富める家、中巻—三十四 隣の大家 など、いずれも富裕な在地豪族層の家に家長(いえぎみ)と家室・家母(いえのとじ)が併記されているのである。

口、金井沢碑（群馬県高崎市山名町所在）

上野国群馬郡下賛郷高田里

三家子孫、為七世父母・現在父母、

現在侍家刀自・他田君目頼刀自・又児加

那刀自、孫物部君午足、次瓢刀自、次乙瓢

刀自、合六口、又知識所結人三家毛人、

次知万呂、鍛師礪部君身麻呂、合三口、

如是知識結而天地誓願仕奉

石文

神龜三年丙寅二月廿九日

この碑は七世父母の菩提と現在父母の安隠を祈って造立されたものであるが、碑文の内容が八世紀前半ごろの氏族の結合のあり方を知ろうえで注目されているのである。

佐野三家の経営を預ってきた家柄の子孫「三家子孫」の筆頭にあげられ、仏教に帰依した集団の統率者であったのが、「家刀自」である。服藤早苗氏は、この家刀自は文章の構成から個人名と考えられるが、一家の主婦権を持つ母の尊称の可能性もあるであろうと指摘している⁽⁶⁾。

しかし、私見では家刀自は個人名ではなく本系譜の中心として、むしろ佐野三家を経営する豪族の家において服藤氏が指摘した後者の可能性より強力な存在であると推測されるであろう⁽⁷⁾。

い) 墨書土器 千葉県山武郡芝山町山田遺跡群

土師器坏・底部内面墨書



墨書土器「家刀自大神奉」〔芝山町山田遺跡群山武考古学研究所写真提供〕

「家刀自

大神奉」

山田遺跡群に近い芝山町庄作遺跡からは、数点の面墨書土器や「国玉神」「竈神」などという祭祀に関する数多くの墨書土器が出土している。その墨書土器の一つに次のようなものがある。

「×秋人歳神奉進 上総×」

断片であるが、土師器の口縁部に横位で、おそらく一巡するように記載していたと考えられる。文意は上総国武射郡□□郷の□□秋人という人物が、歳神に対して、この土器に供物を盛り、奉献することを書き表わしたものである。『歳神』（年神）は歳徳神のことで、その年における福徳をつかさどる神で、毎年正月にこの神を家に招き入れるために、恵方に向けて酒肴をささげるといふ。

この歳神に関する墨書土器を参照するならば、この土師器坏に供物を盛り、大神に奉献したと考えられ、その祭祀行為の主体が「家刀自」である。この「家刀自」は個人名ではなく、家を支配する主婦の意とみられ、おそらくは、家を代表して祭祀を司祭したのであらう。

一方、イへとヤケの問題に言及した吉田孝氏は、女性名「宅媛」と関連させ、次のように述べている。⁽⁸⁾ 例えば、宮主宅媛は和珥臣の祖、日触使主の女で応神天皇の妃と伝えられるように、宅媛（やかひめ）と呼ばれたのはヤケが当時の人々から特別な目でみられていたことを前提としていたのではなからうか。「殿の若子」と同じような感覚で「宅媛」と呼ばれた可能も想定される。家刀自・宅刀自も、『日本霊異記』（興福寺本）

に「家室」を「伊戸乃止之」と訓注しているが、のちに触れる「里刀自」のように「サト」の「トジ」も存在したことから、「トジ」は「イへ」に限らず、家刀自・宅刀自も、「ヤカトジ」であった可能性は十分に存在したとする。⁽⁹⁾ むしろ、私は吉田氏のいうサトのトジが存在したので家刀自もあった可能性があるという点を、逆に家刀自があくまでも家を統率する刀自であるならば、「里刀自」は里を統率する刀自の意と解することができるであらう。

(3) 母刀自

『万葉集』巻六 一〇二二番

父君に われは愛子ぞ 母刀自に われは愛子ぞ 参上る 八十氏人の 手向する 恐の坂に 幣奉り われはぞ退る 遠き土佐道を

『万葉集』巻二十 四三七七番

母刀自も玉にもがもや頂きて角髪のかなにあへ纏かまくも

母刀自は「オモトジ」、四三七七番は防人歌で、母は上代東国方言ではオモではなく「アモ」といい、ともに「家の主である母」を意味している。家刀自とほぼ同様な表記といえる。

以上、天皇の夫人たる大刀自にはじまり、家（ヤケ・イへ）を支配する主婦の尊称として家刀自・母刀自と称せられたことは明白であらう。そこで、さらに進んで里と刀自の関係を明らかにしてみたい。

イ、法隆寺幡銘文

「癸亥年山部五十戸婦為命過願造幡已」

法隆寺に伝えられた幡は明治の献納品の一つになったから、現在その

一部が東京国立博物館と正倉院に保管収蔵されている。この幡は東京国立博物館蔵のものである。「法隆寺昭和資財帳」調査により新たに発見された戊子年銘幡は、切畑健・沢田むつ代両氏により戊子年は持統二年(六八八)に比定することができると紹介された⁽⁹⁾。それをうけて、狩野久氏は、癸亥年銘幡をはじめとする干支年号表記の幡について、従来の年代比定について再検討を加えた⁽¹⁰⁾。周知のとおり、干支年号は大宝以前に限られ、以後は干支を使わず大宝にはじまる固有年号(元号)を使用している、例外がまったく認められない。また文書の年月日の位置が、大宝初年を境にして文頭から文末に逆転するという変化がみられるのである。この二つの理由から、癸亥年を従来、養老七年(七二三)としたのは、天智二年(六六三)に比定すべきであるとした。さらに「山部五十戸」は、先年飛鳥京遺跡で出土した「白髪部五十戸」という木簡が、天智三年(六六四)をあまり下らない時期のものであることが指摘されている⁽¹¹⁾ように、天武末年頃にはじまる「里」制に先行する表記法であるともされている。

これらの幡は命過幡とされ、臨終に際して行う命過幡燈法による供養幡である。銘文は施入年月日＋施入者＋施入事由などを簡潔に記したものである。癸亥年銘幡と類似したものに年紀を欠くが、「山部名嶋豆古連公過時敬造幡」という幡がある。両者の施入者は、山部であるが、これは「阿久奈、弥評君女子為父母作幡」の飽波とともに、法隆寺近辺(平群郡夜麻郷、飽波郷―「和名抄」の人々である。「和名抄」夜麻郷は、もちろん『続日本紀』延暦四年(七八五)五月丁酉条による山部を山と改

姓したことにもとづくものである。したがって、七世紀後半においては、平群評には山部里が存在したことになる。結局、問題の癸亥年銘幡の「山部五十戸婦」は、「山部里婦」となる。「万葉集」卷一六―三八四七「壇越や然も言ひそ五十戸長が課役徴らば汝もなかむ」の「五十戸長」里長を引用するまでもなく、「山部五十戸婦」は山部の五十戸の長の妻を表現しているのであろう⁽¹²⁾。

(四) 墨書土器

東山浦遺跡 岐阜県加茂郡富加町所在

(以下、富加町教育委員会『東山浦遺跡―庁舎建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書』一九七八年による)

本遺跡は川浦川の左岸の段丘上に立地し、現在の羽生地区を中心とする一帯は、古代の半布里の故地と比定され、大宝二年御野国加毛郡半布里戸籍(正倉院文書)との関連が深い地域として注目されている。

発掘調査の結果、約二、八〇〇平方メートルの範囲内に確認された遺構は、竪穴住居跡三一軒、掘立柱建物跡二棟、ピット群二ヶ所、溝状遺構三ヶ所、土坑跡六ヶ所などであった。確認された三一軒の竪穴住居跡のうちではその推定年代の資料を欠くもの六軒を除くと、すべて七世紀中葉から八世紀後葉までの時期に構築されたものである。さらに詳細に言えば、七世紀中葉(第一期)は二軒のみ、また、最も新しい八世紀中葉(後葉(第4～5期))も四軒、残り十九軒はすべて七世紀後葉から八世紀前葉(第2～3期)のもので、年代推定のできた二五軒の約八〇％を占めることになる。

問題の墨書土器は第七号竪穴住居跡（東西四・八×南北四・一メートル）のほぼ中央付近のピットから出土している。ピットは、径三〇×二六センチ、深さ三〇センチの規模で、その断面がやや巾着状を呈している。そのピットの底部に墨書のある坏身と盤が検出されたのである。しかも坏身が下に正位に置かれ、その周囲に小指大の円礫が詰められ固定され、いわゆる“埋納”された状態を呈し、その上を盤が逆位に置いて蓋状となっていたのである。なお、坏の内部には土塊の他は何も検出でなかつた。同ピットは床面を丁寧に掘り込んでおり、同ピット内の覆土と上部の住居跡覆土の土層的变化は認められない。これらの須恵器はいずれも八世紀前葉に属するものである。

坏身は底部外面に墨痕があるが、遺存状況が悪く、判読できない。盤はやはり底部外面に、「里刀自」と墨書されていた。

竪穴住居跡内のピットの上に祭壇を付設して祭祀とする場合も想定される。すなわち、「住居跡内に河原石で石壇状に表面を平らに築いた祭壇をもち、周囲から大盤、小型手捏土器を出土した群馬県入野遺跡第一・一四・一七号住居跡内における祭祀遺構」の例もあり、加えて、本住居跡の貯蔵用ピットと床面から出土し接合した須恵器坏身の外面底部に「坏」の墨書をもつものが検出されていることからみても、本住居跡は特殊な性格をもつものであろうとしている。

以上、二例（山部五十戸婦、「里刀自」より判断すると、さきの「家刀自」が家（ヤケ・イヘ）を支配する主婦の尊称であつたと同様に、里（サト）を統率する里長の妻は、「里刀自」（サトノトジ）と尊称された

のではないか。

四、里刀自の意義

1、郡符の宛所

これまでの郡符木簡の宛所は、次のとおりである。

遺 跡	宛 所
山垣遺跡	春部里長等
八幡林遺跡	青海郷（長）
西河原遺跡	馬道里長
伊場遺跡	竹田郷長里正等
杉崎廃寺	飽□（郷長） <small>（見カ）</small>
屋代遺跡群	屋代郷長里正等
屋代遺跡群	余部里長
荒田目条里遺跡	立屋津長伴マ福麿

郡符はいうまでもなく、公式令の符式にもとづくものである。したがって、その差出と宛所は、基本的には令制の行政組織に準拠する。これまでの郡符木簡においても、宛所は里（郷）長であり、郷里制下では、宛所を「郷長里正等」としている点にも行政組織を明確にふまえていることがわかる。ただ唯一の例外ともいうべき「津長」に宛てる時は、津名と津長人名「伴マ福麿」とを明記している点が注目される。

本木簡の宛所「里刀自」も、郡司―里(郷)長という律令地方行政組織の延長上にあり、里名、ウジ名さえ省略したところに、「里長の妻」を「里刀自」と通称していたと推察することの妥当性の高いことを示しているであろう。金井沢碑における家刀自の場合も、全体系譜の中心として、あえて姓名を記していないことと共通した表記といえよう。

また、有勢な家(ヤケ・イエ)において家長と家刀自(家室)が併称されたのと全く同様に、里においても里長と里刀自は併称されたのであろう。その場合、本木簡の年代は九世紀半ば頃とみたが、郷制下にもかかわらず「郷刀自」ではなく、「里刀自」と表記されたのは、「里刀自」の呼称が定着していたことを何よりも示しているのかもしれない⁽¹⁾。この点は、里長を七世紀後半において「五十戸長」、里長の妻を「五十戸婦」と表記したが、八世紀においても『万葉集』には、「五十戸良(さとおさ)」(巻五、八九二番)、「五十戸長」(巻十六、三八四番)と前代の表記を踏襲していることと同様の傾向と理解できよう。

里名さえ省略している点については、次のようなことが想定されるであらう。

本遺跡は、広大な荒田目条里遺構に隣接していること、郡家の中心施設の置かれた根岸遺跡の西北に位置し郡家所在郷(里)に相当すると考えられることなどから、磐城国造の系譜を引く大領於保磐城臣は、その郡司職田を荒田目条里遺構内に有し、従来からの強い支配関係に基づき、郡司職田の田植の労働力として磐城郡家所在郷・磐城郷の里刀自に命じたとすれば、里名省略も肯づけるであらう。

古代において、農業労働力として女性が大きな比重を占めたことは間違いないが、さらに女性が農業経営・管理に従事していた点も見逃すことはできない。この点については、服藤氏が二氏の論文を引いて説明されている。すなわち、大伴坂上郎女は、奈良の佐保宅や春日里等から、竹田荘・跡見荘等を春秋に往復して農業経営・管理を行うばかりでなく、大伴氏一族の祭主として祭祀を司っていたから、一族員の荘へも赴き農耕に欠かせない宗教的勸農をも担っていた(山本幸男「八世紀における王臣家発給文書の性格」『ヒストリア』八九、一九八〇年)。このような農業経営・管理・勸農を行う女性は貴族層ばかりではなかった。在地の富豪層においても家産所有主体として農業経営・管理を行う女性が存在していた(関口裕子「歴史学における女性史研究の意義―日本古代史を中心に」『人民の歴史学』五二号、一九七七年)。

里長の職掌は、戸令為里条に規定されているように、「禁察非違」という治安維持的機能と「檢校戸口・課殖農桑・催賦賦役」という行政的・財政的機能であった。里長は具体的には、周知のとおり、貧窮問答歌「楚取る五十戸良(さとおさ)」が声は、寝屋戸まで来立ち呼ばひぬ」(『万葉集』巻五、八九二)、「檀越や然も言ひそ五十戸長(さとおさ)」が課役徴らば汝も泣かむ」(『万葉集』巻十六、三八四七)などにみえるように、もっぱら課役徴発に従事した様をうかがうことができる。すなわち、里長は課役徴発と戸籍・計帳作成など行政上の役割を負い、おそらく郡家に頻繁に出仕していたのであろう。それに対して、集落における各戸の構成員の動向を適確に把握し、農業経営に隠然たる力を発揮したのは里

長の妻たる里刀自ではなかっただろうか。

一方、田植が、田のすき返しや引水を伴うもつとも多くの労働力を一時に必要とする農業労働であることは、いうまでもない。

すでに吉田晶氏も指摘しているように、仮寧令集解給休暇条の古記に、大和国の諸郡の田植の時期として、四・五・六月をあげている。稲に早稲・中稲・晩稲の三種があったこと、さらにその品種が郡を単位にほぼ統一されていたという。こうした点をとらえて、吉田氏は雇傭労働力の供給関係は、日常的な「共同体」の粋をこえて、相当に広い地域毎に恒常的に行われる可能性が生ずると指摘している¹⁵⁾。

この郡符に示された当初指名された三十六人の歴名に対し、たった二人の欠員におさめられたのは、郡家に備えられた戸籍・計帳にもとづく徴発では不可能である。五月一日に発し、三日に召喚先の現地に赴く人員を、適確に列記できるのはやはり里の実状をつねに掌握していた里(郷)長または里長の妻しか考えられない。

郡司職田の田植の労働力を里刀自を通して徴発した。この労働力徴発は律令制下の雑徭等以外のおそらく警城国造による大化前代以来の在地における支配関係にもとづくものであろう。それをあえて律令制下の公式令符式にもとづく郡符という書式により、郡―里(郷)制ルートを通じて里刀自に命じて、田人三十四人を召喚したところに律令国家の本質的側面を垣間みることができるのではないか。

この郡符は種籾の荷札などとともに、おそらく郡司職田の設定された荒田目条里遺構に近接した地点に廃棄されている。このことは、この郡

符木簡は郡司職田の田植を行ったつまり召喚先またはその付近で廃棄されたことになる。郡符木簡は召喚人とともに、召喚先である郡家内またはその出先機関において廃棄されたこととなるのである。

荒田目条里遺跡では、宛所の異なる二点の郡符木簡が出土したのである。このことは、実に重要な意義を示すことになる。すなわち第一号木簡「立屋津長伴マ福鷹」、第二号木簡「里刀自」という宛所の異なる郡符が同一遺跡の同一遺構から出土したことは、郡符木簡は宛所で廃棄されるのではなく、召喚人らとともに差出の郡家、または郡家関連施設(召喚先)に戻り、その施設およびその付近で廃棄されることをみごとに証明したとみなしてよい。

一方、本木簡は古代の農業経営と女性の役割を解明してゆく大きな手がかりを得たと評価すべきであり、今後よりその実態を具体的に究明しなければならぬと考えられる。

註

- (1) 財団法人いわき市教育文化事業団「福島県いわき市荒田目条里遺跡」『月刊文化財発掘出土情報』(ジャパン通信社)一九九三年十月
- (2) 藤本潔「福島県南東部に位置する海岸平野の浜堤列とその形成時期」『東北地理』第四〇巻第二号 一九八八年五月
- (3) 鈴木貞夫・夏井(菅波・荒田目)の条里制遺構「『いわき地域学會夏井地区総合調査報告』一九八八年八月
- (4) 加藤優「奈良・藤原宮跡」『木簡研究』第五号 一九八三年
- (5) 義江明子「『刀自』考―首・刀自から家長・家室へ―」『史叢』第四十二号 一九八九年五月
- (6) 服藤早苗「古代の母と子」(森浩一編『日本の古代』第二二巻 中央公論社) 一九八七年
- (7) 金井沢碑の系譜については、続柄はすべて家刀自との関係を示すと理解でき、

A Note on the *Satotoji* (“Wife of Village Head”)

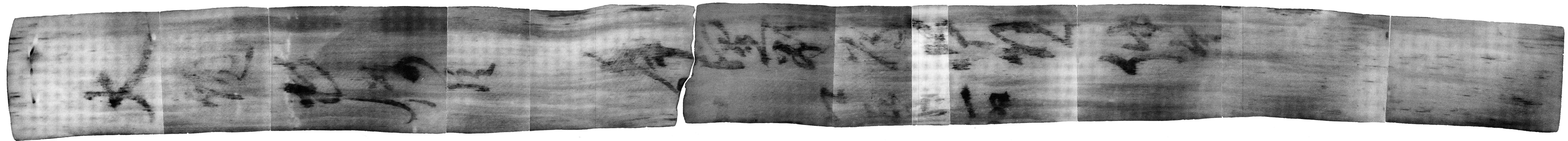
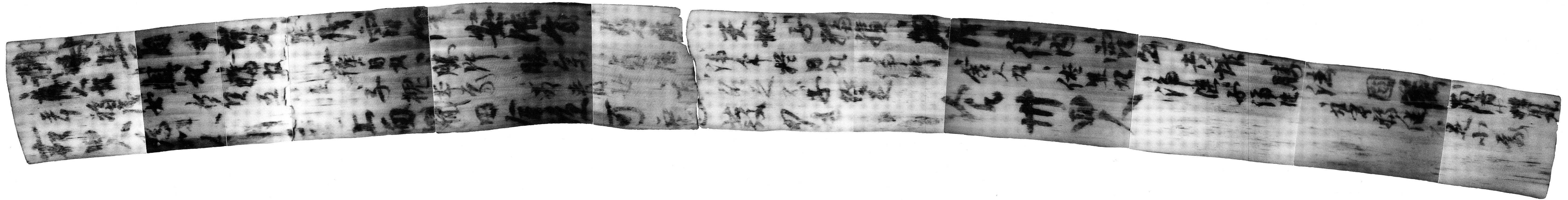
HIRAKAWA Minami

An important theme in recent ancient history research is the elucidation of how the *gōzoku*, or local powerful families, controlled farmers in various parts of the country in ancient times. The *gun-fu mokkan*, i.e., wooden tablets on which *gun* (district) officials — who were of *gōzoku* background — issued directives to those in responsible posts under their jurisdiction, have been receiving much attention as a source revealing what the lowest rungs of local administration were like. The tablet directives were written according to a strictly prescribed official form, called *fushiki*, under the *ritsuryō* system of government. The issuing authority and the addressee are expressly mentioned, and as a rule, it is presumed, they were relayed through the *ritsuryō* local administrative organization (from the *gun* to its subdivisions, such as *Sato*) to summon specific persons. Almost all the approximately ten *gun-fu mokkan* excavated thus far were addressed to *Sato* heads. The only exception is one issued to a port administration head, whose personal name was included.

A *gun-fu mokkan* (*mokkan* No. 2) newly unearthed at the Aratame Jōri Site (Iwaki, Fukushima prefecture), was addressed to the “*Satotoji*,” conveying an order for mobilization of thirty-six farmers for rice-planting at fields (*shikiden*) granted to the *gun* official (who sent the tablet) by the central government as part of his salary. The tablet is significant in a number of ways. First is the matter of the identity of the “*Satotoji*.” The term *toji* was usually used to indicate a woman leading a group, as in the usage of *ie-toji*, meaning “mistress” as distinct from the *ie-osa*, or male household head. The *Satotoji*, to whom the tablet was addressed, can therefore be interpreted to mean the wife of a *Satoosa* (*Sato* head) who governed the village, if the tablet is understood in the context of the usual route by which administration was relayed from *gun* to *Sato*.

Another important implication of the tablet is its evidence of the role played by the *Satoosa* and his wife at the lowest level of administration, the former compiling household registers and tax documents and facilitating the collection of taxes in kind and corvée levies, and the latter, known as the *Satotoji*, acting as a leader in local farm management.

Until the discovery of the tablet nothing was known about the specific activity of the *Satotoji*, making it an invaluable artifact for the study of the relationship between women and agricultural management in ancient Japan.



荒田目条里遺跡第2号木簡〔いわき市文化事業団写真提供〕